

万葉集210番歌の「鳥穂」の解釈について

竹 生 政 資¹, 西 晃 央²

An Interpretation of “Cockscomb” in the 210th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集210番歌は柿本人麻呂が妻をなくしたときに泣き悲しんで作った三つの長歌（いわゆる「泣血哀慟歌」）のうち第二番目のものである。この長歌の中に「鳥穂」という表現がある。この歌に続いて、表現が多少異なるだけでほとんど同じ内容の第三番目の長歌（213番歌）が掲載されている。そこで第二番目と第三番目の長歌を比較してみると、前者で「鳥穂自物」と表記されているところが後者では「男自物」となっている。したがって「鳥穂」は「をとこ」と訓み、意味は「男」であることは明らかである。問題はなぜ「鳥穂」が「をとこ」と訓めるのかである。この問題に対して現在通説となっているのは、「鳥穂」の「鳥」を「烏」の誤字と見なし、さらに「穂」を「徳」の誤字と見なし、結局「鳥穂」を「烏徳」と原文改訂した上で「をとこ」と訓む、いわゆる「誤字説」である。

ところが、万葉集の写本はすべて「鳥穂」であり「烏徳」と表記されたものは一つもない。さらに、詳細については本文で議論するように、通説の「誤字説」はほかにもいくつか問題点がある。そこで本論文では「鳥穂」を原文のままで解釈する新しい案を提案する。すなわち、「鳥穂」は万葉集に広く用いられている「義訓」の一種であり（例えば「あかとき（暁）」を「鶏鳴」と表記するたぐい）、「鳥穂」という表記は「鶏のトサカ」を表現したものだと考え。鶏のトサカは、本文中の写真でも示すように、雌の小さなトサカに対して雄のトサカは非常に大きく「雄のシンボル」とも言えるものである。しかもノコギリのようにギザギザした形が何となく「穂」に似ている。したがって、万葉時代の人々の頭の中には「鳥穂」→「鶏のトサカ」→「雄のシンボル」→「男（をとこ）」という連想があり、この連想が「鳥穂」を「をとこ」と訓ませたのであろう。こう解釈することで、従来のように不自然な原文改訂を行なうことなく原文のままで歌を理解することができる。

1. はじめに

この論文の目的は、万葉集210番歌に含まれる「鳥穂」という表現の解釈について、現在通説となっている「誤字説」の問題点を指摘しそれに代わる新しい解釈を提案することである。そのためにまず、関連

¹ 佐賀大学医学部地域医療科学教育研究センター

² 佐賀大学文化教育学部理数教育講座

する万葉集の歌（210番歌と213番歌）を提示することから始めよう。以下に、これらの歌の訓読文と原文を新日本古典文学大系のテキストにしたがって掲載する（[1]、pp. 154-158）。訓読文の「男じもの」および原文の対応する箇所には下線を引いた。なお、柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」は三つの長歌からなるが、以下では第一番目の長歌（207番歌）は省略し、第二番目と第三番目の長歌（210番歌と213番歌）だけを示した。また、それぞれの長歌には二、三の短歌（反歌）が添えられているが、以下の考察にとっては必要ないので省略した。

02/0210 うつせみと 思ひし時に 一に云ふ、「うつそみと 思ひし」 取り持ちて 我が二人見し 走り出
 の 堤に立てる 槻の木 の こちごちの枝の 春の葉の しげきがごとく 思へりし 妹にはあれど 頼
 めりし 児らにはあれど 世の中を 背きしえねば かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り
 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣
 くごとに 取り与ふる ものしなければ 男じもの わきばさみ持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく
 つま屋のうちに 昼はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに 恋ふ
 れども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言へば 岩根さくみて
 なづみ来し 良けくもそなき うつせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく思へば
 【原文】打蟬等 念之時尔 一云、宇都會臣等 念之 取持而 吾二人見之 趁出之 堤尔立有 槻木之
 己知若知乃枝之 春葉之 茂之如久 念有之 妹者雖有 憑有之 児等尔者雖有 世間乎 背之不得者
 蜻火之 燎流荒野尔 白妙之 天領巾隠 鳥自物 朝立伊麻之弓 入日成 隠去之鹿齒 吾妹子之 形見
 尔置有 若児乃 乞泣毎 取与 物之無者 鳥穂自物 腋挟持 吾妹子与 二人吾宿之 枕付 孀屋之内
 尔 昼羽裳 浦不樂晩之 夜者裳 気衝明之 嘆友 世武爲便不知尔 恋友 相因乎無見 大鳥乃 羽易
 乃山尔 吾恋流 妹者伊座等 人云者 石根左久見手 名積来之 吉雲曾無寸 打蟬等 念之妹之 珠蜻
 髻髥谷裳 不見思者

或る本の歌に曰く

02/0213 うつそみと 思ひし時に たづさはり 我が二人見し 出で立ちの 百枝槻の木 こちごちに
 枝させるごと 春の葉の しげきがごとく 思へりし 妹にはあれど 頼めりし 妹にはあれど 世の
 中を 背きしえねば かぎるひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちい行き
 て 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り委する 物しな
 ければ 男じもの わきばさみ持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋のうちに 昼は うらさ
 び暮らし 夜は 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽
 易の山に 汝が恋ふる 妹はいますと 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し 良けくもそなき うつ
 そみと 思ひし妹が 灰にていませば

【原文】宇都會臣等 念之時 携手 吾二見之 出立 百兄槻木 虚知期知尔 枝刺有如 春葉 茂如
 念有之 妹庭雖在 恃有之 妹庭雖在 世中 背不得者 香切火之 燎流荒野尔 白栲 天領巾隠 鳥自
 物 朝立伊行而 入日成 隠西加婆 吾妹子之 形見尔置有 緑児之 乞哭別 取委 物之無者 男自物
 腋挟持 吾妹子与 二吾宿之 枕附 孀屋内尔 日者 浦不怜晩之 夜者 息衝明之 雖嘆 爲便不知
 雖眷 相縁無 大鳥 羽易山尔 汝恋 妹座等 人云者 石根割見而 奈積来之 好雲叙無 宇都會臣
 念之妹我 灰而座者

上に示した二つの長歌を比較してみると、ところどころ少し異なる表現があるものの、内容的にはまっ

たく同じであることがわかる。したがって、210番歌の「鳥穂自物」に対応する句が213番歌では「男自物」と表記されていることに注目すると、「鳥穂」は「男」の意味であり「をとこ」と訓むことに疑いの余地はない。問題はなぜ「鳥穂」が「男」を意味し「をとこ」と訓むのかという点である。

この問題について現在通説となっているのは、賀茂真淵が「万葉考」の中で提案した「誤字説」、すなわち「鳥」を「烏」の誤字、「穂」を「徳」の誤字と見なし、「鳥穂」を「烏徳」と原文改訂した上で「をとこ」と訓むやり方である。しかしながら、この「誤字説」には少なくとも三つの問題点がある。以下の第2節ではこの「誤字説」の問題点について検討し、続く第3節ではそれに代わる新しい解釈を提案する。

2. 「誤字説」の問題点

210番歌の「鳥穂」を「をとこ」と訓む理由について、現在の主な万葉集の注釈書はすべて賀茂真淵の「誤字説」を採用している。例えば、新日本古典文学大系は脚注で次のように述べている（〔1〕、pp.155-156）。

「男じもの」は、諸本の原文「鳥穂自物」。「烏徳自物」の誤字かとする万葉考の説に拠る。

そのほか、新編日本古典文学全集、講談社文庫、日本古典文学大系などの注釈書もすべて同じ「誤字説」をとっている。しかしながら、この「誤字説」には以下に示すように少なくとも三つの問題点がある。

まず第一に、諸本の原文がすべて「鳥穂」となっていることである。このことは、筆写時に誤写された可能性が低いことを意味する。「誤字説」では、もともと「烏徳」だったものが筆写時に「鳥穂」へ誤写されたと考えるが、このような誤写が起こるためには、「鳥」から「烏」へ、「徳」から「穂」へと、隣接する二つの文字が誤写されなければならない。しかし、一つの文字の誤写ならまだしも、隣接する二つの文字が共に誤写される可能性はきわめて低い。しかも誤写は訓読可能な「烏徳」から訓読不能な「鶏穂」へと逆方向に起こっている。さらに、もし筆写時に誤写が起こったのであれば、多くの写本の中に「烏徳」や「鳥穂」などの部分的に誤写された写本がせめて一つくらいは存在してもよさそうなのに、実際にはそのような写本は一つも存在せず、存在するのは二文字とも誤写された「鳥穂」のものばかりである。このような事実を前にして、「鳥穂」を「烏徳」の誤写だとすることは、たとえこの二字がほかの理由から「をとこ（男）」を表わす表記でなければならないという事情があるにせよ、大いに疑問が残る。

第二に、仮にこの「誤字説」を認めるとしても、もっと大きな問題がある。それは万葉集すべての歌の中に「を」を「烏」の字で表記した例がただの一例もなく、また「とこ」あるいは「とく」の音を「徳」の字で表記した例もないという事実である。したがって、万葉時代に「をとこ」を「烏徳」という表記によって表わした可能性はきわめて低い。実際に万葉集で「をとこ」がどのように表記されているかについては後に表2で示す。

第三に、通説では「鳥穂」を「烏徳」と原文改訂して「をとこ」と訓み、それで問題は解決済みとしているようだけれども、実は万葉集が「呉音」体系に基づいていることを考慮に入れるならば、そもそも「烏徳」を「をとこ」と訓むことはできないのである。なぜならば、角川書店の「大字源」によれば（〔2〕、以下の例も同様）、

「鳥」の字音は、呉音「ウ」、漢音「オ・ヲ」

「徳」の字音は、呉音・漢音ともに「トク」

であるから、「呉音」体系の訓みにしたがう限り「烏徳」は「ウトク」であって「ヲトコ」ではない。「ヲ

トコ」と訓むためには、まず「漢音」体系で「ヲトク」と訓み、続いて語尾の「ク」を少し近い音の「コ」と入れ換えなければならない。しかしこのような訓みは、万葉集が「漢音」体系ではなく「呉音」体系であるという事実と反する。ちなみに古事記も「呉音」体系である。実際に万葉集が「呉音」体系であることは、例えば今ここで問題になっている「烏」という字がどういう使われ方をしているか調べてみればわかる。その結果が表1である。

原文	訓読文	件数
烏梅	うめ (梅)	35
烏玉	ぬばたま	23
烏珠	ぬばたま	2
水烏	う (鶉)	2
朝烏	朝がらす	2
夜烏	夜がらす	1
香烏髪	か黒き髪に	1
喫烏	食むからす	1

表1

表1の中で最も用例件数が多い「烏梅」は「呉音」体系による一字一音の万葉仮名表記である。そのことは「烏」と「梅」の字音から

「烏」の字音は、呉音「ウ」、漢音「オ・ヲ」

「梅」の字音は、呉音「メ」、漢音「バイ」

であることから明らかで、「烏梅」は「呉音」体系では「ウメ」、漢音体系では「ヲバイ」となる。

表1の残りの表記のうち、「朝烏」、「夜烏」、「喫烏」では「烏」は「からす」と訓読みされている。それ以外の表記、「烏玉」、「烏珠」、「水烏」、「香烏髪」などではいわゆる「義訓」表記（例えば「あかとき（暁）」を「鶉鳴」と表記するたぐい）が用いられており、烏の黒い性質や鶉に似ている性質を想定して「ぬばたま」や「う（鶉）」や「黒き」などと訓ませている。

これに対して、日本書紀では（部分的に）「漢音」体系による表記がなされている。以下、「烏」に関する例の一つを示そう。日本書紀の景行天皇十八年七月条に、景行天皇が筑後国の御木（現在の福岡県大牟田市あたり）の高田行宮に滞在されたとき、長さが九百七十丈もある大きな倒れたクヌギの木があり、百官たちがその木を踏んで往来したときに歌ったとされる歌が掲載されている（[3]、p. 80、pp. 475-476）。

【原文】阿佐志毛能 瀾概能佐烏麼志 魔幣菟耆瀾 伊和哆羅秀暮 瀾開能佐烏麼志

【訓読文】朝霜の 御木のさ小橋 群臣 い渡らすも 御木のさ小橋

この歌の中の「佐烏麼志」という表記に注目してみよう。この四つの漢字の字音はそれぞれ

「佐」の字音は、呉音・漢音ともに「サ」

「烏」の字音は、呉音「ウ」、漢音「オ・ヲ」

「麼」の字音は、呉音「マ」、漢音「バ」

「志」の字音は、呉音・漢音ともに「シ」

である。一方、歌の前書きから「佐烏麼志」は「サヲバシ（さ小橋）」と訓むべきことは明らかであるから、「佐烏麼志」は「漢音」体系で表記されていることがわかる。実際、「呉音」体系で訓むと「サウマシ」となり意味をなさない。ただし、上の歌のすべての漢字が「漢音」体系で表記されているわけではない。例えば、「毛」、「能」、「瀾」、「魔」、「和」などの漢字は明らかに「呉音」体系である。それは次に示すこ

これらの漢字の字音からも明らかであろう。

「毛」の字音は、呉音「モウ」、漢音「ボウ」

「能」の字音は、呉音「ノウ」、漢音「ドウ」（あるいは呉音「ナイ」、漢音「ダイ」）

「瀾」の字音は、呉音「ミ」、漢音「ビ」

「魔」の字音は、呉音「マ」、漢音「バ」

「和」の字音は、呉音「ワ」、漢音「カ（クワ）」

このように、上にあげた日本書紀の歌謡では「呉音」体系と「漢音」体系が入り混じって表記されていることがわかる。

以上のことから、万葉集が「呉音」体系に基づいて表記されていること、またその結果の一つの現われと見ることもできるが、万葉集では「鳥」は呉音「ウ」の音仮名であり漢音「ヲ」を表わすために用いられている例は一つもないこと、「う」と「を」は明らかに別音であり「うとく」を「をとこ」と同じとすることはできないこと、などが明らかとなった。通説に関して言うならば、甲類と乙類のごくわずかな違いに神経質になる万葉学者たちが「う」と「を」の音を混同する説を支持しているのは不思議なくらいである。それではこの問題を解決する方法はあるのだろうか。次の第3節でこの問題について検討しよう。

3. 新しい解釈の提案

前節では、通説の問題点を指摘し、「鳥穂」を「鳥穂」の誤写だとするやり方では本当の問題解決にはならないことを示した。そうすると、あと取るべき道は原文「鳥穂」をそのまま受け入れて「義訓」として解釈するほかはない。「義訓」の方法は万葉集で広く用いられているもので、表1や後の表2でも用いられている。



図1



図2

ここでヒントになるのは、「鳥穂」を「鶏のトサカ」の比喩表現だと考えてみることである。「鳥穂」は字義どおり解釈すれば「鳥の穂」であるが、もちろん鳥に「穂」などはないので、「穂」を稲や麦などの穂そのものと考えずに「稲や麦の穂のような形をしているもの」と比喩的に受け取ってみよう。図1に稲穂、図2に麦穂の写真を示した。また、図3と図4はニワトリの「トサカ」を示したものである。図3の右手の大きなトサカをしているのがオスで、左手の小さなトサカをしている2羽がメスである。図4は別のオスの例である。

図1と図2から明らかなように、稲穂や麦穂は「最上部」にできるものであり、また図3と図4から鶏

の「最上部」にあるのは「トサカ」であるから、両者には確かに共通性がある。また「トサカ」は見ようによってはギザギザした形が何となく稲穂や麦穂に似ている。さらに、鶏のトサカは「オス（雄）」のシンボルである。このことは図3と図4を見れば明らかである。雌のトサカは小さく目立たないが、雄のトサカは大きくギザギザして目立つ。ここから、「鳥穂」→「鶏のトサカ」→「雄のシンボル」→「男（をとこ）」という連想が生まれ、「鳥穂」が「男（をとこ）」の「義訓」として用いられた可能性がある。



図 3



図 4

この解釈が妥当であることを間接的に裏付けるのが次の歌の存在である。第1節に掲載した二首と同様、歌の訓読文と原文を新日本古典文学大系のテキストにしたがって掲載する（[1]、pp. 297-299）。

死にし妻を悲傷して高橋朝臣の作りし歌一首 短歌を并せたり

03/0481 白たへの 袖さしかへて なびき寝し わが黒髪乃 ま白髪に なりなむ極み 新世に ともにあらむと 玉の緒の 絶えじ妹と 結びてし ことは果たさず 思へりし 心は遂げず 白たへの 手本を別れ にきびにし 家ゆも出でて みどり子の 泣くをも置きて 朝霧の おほになりつつ 山背の 相楽山の 山のまに 行き過ぎぬれば 言はむすべ せむすべ知らに 我妹子と さ寝しつま屋に 朝には 出で立ち偲ひ 夕には 入り居嘆かひ わき挟む 子の泣くごとに 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の 音のみ泣きつつ 恋ふれども 験をなみと 言問はぬ ものにはあれど 我妹子が 入りにし山を よすかとぞ思ふ

【原文】白細之 袖指可倍亘 靡寐 吾黒髪乃 真白髪尔 成極 新世尔 共将有跡 玉緒乃 不絶射妹跡 結而石 事者不果 思有之 心者不遂 白妙之 手本矣別 丹杵火尔之 家従裳出而 緑児乃 哭乎毛置而 朝霧 髪髯為乍 山代乃 相楽山乃 山際 往過奴礼婆 将云為便 将為便不知 吾妹子跡 左宿之妻屋尔 朝庭 出立偲 夕尔波 入居嘆会 腋挟 児乃泣毎 雄自毛能 負見抱見 朝鳥之 啼耳哭管 雖恋 効矣無跡 辞不問 物尔波在跡 吾妹子之 入尔之山乎 因鹿跡叙念

この歌を第1節に掲載した210番歌と比較してみると、歌の作者はそれぞれ違うけれども、歌の内容は非常によく似ていることがわかる。いずれも幼い子を残して亡くなった妻の死を傷み偲ぶ歌である。ここで注目したいのは、二つの歌にまったく同じ表現「男じもの」が使われており、210番歌の原文では「鳥穂自物」、481番歌では「雄自毛能」とそれぞれ異なる表記が用いられている点である。「男」を表わすのに210番歌では「鳥穂」、481番歌では「雄」という表記が使われている。

万葉集では「雄」という表記は「人間の男」を含めて「動物の雄」を表わす。歌の内容から考えて、481番歌では「雄」が「人間の男」を表わすことは明らかであるが、次に示すように「雄」が「動物の雄」を表わす例もある〔4〕。

10/2141 このころの秋の朝明に霧隠り妻呼ぶ鹿の声のさやけさ

【原文】 比日之 秋朝開尔 霧隠 妻呼雄鹿之 音之亮左

この歌の原文「雄鹿」は歌の内容から考えて「オスの鹿（をじか）」であることは言うまでもない。しかし、「雄鹿」の訓み方としては「をじか」と訓まずに単に「しか」と訓むのが通説となっている。これは、「妻呼ぶをじか」とすると字余りになること、また「妻呼ぶ」という表現の中に間接的に「オス」の鹿であることが含まれているので「妻呼ぶしか」で十分意味が通るからであろう。

「をとこ」の表記	件数
壮士	18
壮	3
丁子	3
男	2
遠刀古	1
乎登祐	1
乎登古	1
乎等古	1
乎等故	1
雄	1

表 2

万葉集において「をとこ（男）」と訓むべきところがどのように表記されているかを調べた結果が表2である。この表から万葉集では「をとこ（男）」の「訓字」表現としては「壮士」、「壮」、「丁子」、「男」などを用いるのが一般的であることがわかる。この表には「雄」の字を用いた例が一つだけある。これは本来「動物のオス」を意味する「雄」の字を「義訓的」に用いて人間の「をとこ」を表したもので、上にあげた481番歌がこれである。同じような発想から、「鶏のオス」を表す「鶏穂」という「義訓」表現を用いて「をとこ」を表したものが210番歌であると考えることができる。この考えは、先に述べた「鳥穂」→「鶏のトサカ」→「雄のシンボル」→「男（をとこ）」という考え方とコンシステントである。ちなみに、万葉集には「男じもの」という表現が四例あるが、それぞれ原文表記は次のとおりである。「鳥穂自物」（210番歌）。「男自物」（213番歌）。「雄自毛能」（418番歌）。「男士物」（2580番歌）。

4. おわりに

本論文では万葉集210番歌の中の「鳥穂」という表現の解釈について検討してきた。「鳥穂」は万葉集213番歌との比較から「をとこ（男）」と訓むべきことは古くから指摘されてきたが、問題はどのような理由で「鳥穂」を「をとこ」と訓むのかという点にあった。この問題について通説では、「鳥穂」を「鳥徳」の誤字だと見なして原文改訂を行い、「鳥徳」を「をとこ」と訓んできた。しかしながら、本論文ではこのような原文改訂には少なくとも三つの問題点があり本当の問題解決にはなっていないことを指摘した。そして「鳥穂」を原文改訂せず元の表記のままで解釈する新しい案を提案した。すなわち、「鳥穂」→「鶏

のトサカ」→「雄のシンボル」→「男（をとこ）」という連想から「鳥穂」を義訓的に「をとこ」と訓ませたとする解釈である。この解釈が妥当なものであるかどうか多くの方々のご批判を仰ぎたい。

5. 参 考 文 献

- [1] 「萬葉集一」、新日本古典文学大系、岩波書店、1999年。
- [2] 「大字源」、尾崎雄二郎ほか編、角川書店、1992年。
- [3] 「日本書紀（二）」、井上光貞ほか、岩波文庫、1994年。
- [4] 「萬葉集二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.499、2000年。